

越中桃井軍の侵攻と南北朝北加賀合戦



卯辰山から金沢市街を望む（金沢市）

南北朝時代後期の応安2年/正平24年^{※1}（1369年）に、前越中守護の桃井氏が北加賀に侵攻し、金沢市域周辺の石川郡の各地で、加賀・能登の室町幕府（足利將軍家）方との間で合戦を展開した。

これに先立ち、同年4月28日に、先きの足利尊氏・直義兄弟の軍事抗争（観応の擾乱^{※2}）で敗北した直義党の桃井直常が、越中で挙兵したのち能登に乱入し、同国鹿島郡の金丸・能登部城（現中能登町）に拠る、吉見左馬助や能登守護代同伊予入道率いる幕府方の能登守護吉見勢と、6月1日に至るまでの間、連日にわたり合戦を繰り返した。しかし吉見方の攻勢に遭って、桃井軍はいったん能登から越中に退去した後、今度は南北朝時代の対立図（赤字・青字は本稿の登場人物）

南北朝の争い 1336-92	持明院統（北朝） 足利尊氏～足利義満（光厳～後小松天皇）		大覚寺統（南朝） 後醍醐～後亀山天皇
観応の擾乱 1350-52	足利尊氏党（幕府軍） 足利尊氏（征夷大將軍） 高師直（執事） 足利義詮（2代將軍・尊氏嫡男）	足利直義党（反乱軍） 足利直義（副將軍格・尊氏弟） 足利直冬（尊氏子・直義養子） 桃井直常（越中守護）	北畠親房、四条隆資、 新田氏、楠木氏など
能登島合戦 1353-54	桃井盛義（能登守護） 吉見氏頼（能登守護） 吉見詮頼（氏頼嫡子） 吉見民部少輔	桃井直常（前越中守護） 桃井兵庫助	長胤連（能登島西方地頭伊勢守） 富来俊行（富来院地頭）
北加賀合戦 1369-71	吉見氏頼（能登守護） 吉見左馬助 吉見伊予入道（能登守護代） 得田章親・章房（得田莊地頭） 得江季員（志雄保地頭） 富樫竹童丸（昌家・加賀守護） 額用家（加賀守護代） 斯波義将（越中守護） 二宮円阿（越中守護代）	桃井直常（前越中守護） 桃井直和（直常嫡男）	

※1 応安は北朝（後光厳天皇）、正平は南朝（長慶天皇）の年号。時の將軍は足利義満。

※2 足利尊氏の執事の高師直と、副將軍格の足利直義との対立から起きた全国規模の内乱。室町幕府中枢の分裂により全国の諸將も二つに分かれ、さらに権力奪回を目論む南朝もうごめき、情勢は二転三転。高師直は直義党に討たれ、直義も兄尊氏に捕らえられ殺害されたが、桃井直常は以降20年近くにわたり叛乱を続けた。

幕府方の加賀守護富樫氏を攻撃するため、加賀に転進したのであった。

桃井直和勢の富樫城攻略

桃井直和（直常の嫡男）率いる越中勢は、恐らく加賀との国境に位置にする松根（現小矢部市内山町・金沢市松根町）を越えて北加賀に攻め入ったものと思われる。その後、石川郡の平岡野（現金沢駅付近）に進んで布陣した後、同年8月には、石川郡野市（現野々市市）に所在する加賀の守護所（富樫城）を包囲し、日々夜々激しい攻撃を仕掛けた。

富樫氏の居館は、現在の野々市市住吉町付近に所在し、約1町四方（1辺約109メートル）の方形の広大な敷地をもち、周囲には堅固な堀と土塁を構えた城砦であったことが、近年の発掘調査によって明らかになっている。

当時の加賀では、先きに死去した守護富樫氏春の遺児竹童丸（後の昌家）が、一族の守護代額用家の後見によって守護の地位にあり、桃井勢の猛攻にあって危機的状況に陥っていた。

こうした加賀守護富樫氏の危機を

救うため、幕府から北陸における桃井氏の叛乱制圧の命令をうけた能登守護吉見氏頼が、京都より下向し、能登から越前まで出迎えに赴いた得田荘（現志賀町）地頭得田章親、志雄保（現宝達清水町）地頭得江季員らを同行して加賀に到着した。そこで能登より呼び寄せた一族の吉見左馬助率いる得田章房らの能登勢と合流し、富樫城救援に駆けつけたのである。その結果9月7日には、富樫氏は吉見勢の援軍を得て、辛うじて危機を脱することができた。このため桃井勢は富樫城の囲みを解いて、転じて日本海海運における北加賀の要湊である石川郡の宮腰（現金沢市金石町）に攻め寄せた。

吉見軍は、翌8日に桃井軍の北加賀経略の拠点となっていた平岡野の陣に押し寄せ、激しい戦闘の末、大將桃井直和以下を追い落とし、翌9日には宮腰に攻め入ったため、桃井勢はその攻勢に堪えかね、隣接する同郡の大野宿（現金沢市大野町）へと退去した。

宇多須山居陣と陥落

9月12日、能登吉見勢は、大野宿に拠る桃井軍に攻撃を敢行した。このためその日の夜、合戦で敗北した桃井勢は、大野宿から没落し、浅野川中流域右岸の河北郡の宇多須山（現金沢市内卯辰山）に退いた。

宇多須山は、標高141メートルの丘陵で、眼下に北陸道と浅野川を望む要衝の地であったため、桃井勢はそこに要塞を築いて陣を構え、態勢の建て直しをかけた。しかしここでも吉見軍の攻撃を受け、同月15日には、宇多須山の城砦が陥落したため、桃井直和率いる越中の桃井勢は、北加賀を捨て国境の松根砦や越中国砺波郡の蟹谷一条城（現小矢部市八代）に退去した。だが17日に、そこも吉見軍に追撃されて抗しきれず、同郡の千代様城（現砺波市庄川町庄）に退却する。ここに桃井直和の加賀守護富樫氏攻略は、援軍の能登勢（守護吉見軍）の奮戦によって失敗に帰した。

能登吉見軍の越中諸城攻略

能登守護吉見氏頼率いる能登勢の桃井軍追撃は、その後も続けられ、桃井方の拠る越中の諸城で合戦が展開された。9月18日に、吉見軍による千代様城攻撃が始まり、24日には、同城と近接する砺波郡の井口

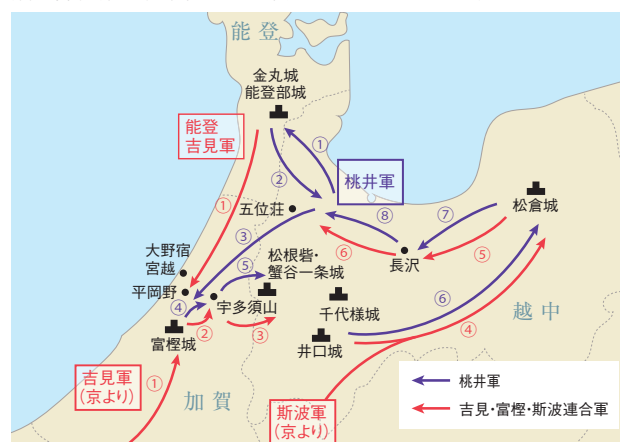
城（現南砺市池尻）が陥落した。井口城は、砺波郡の有力豪族であった井口氏の居城で、南北朝期には、同氏は桃井直常方に属しており、当時同城は、同郡における桃井方の軍事的拠点となっていた。

その後も桃井直常は、新川郡の松倉城に籠城して、室町幕府に敵対する姿勢を続けており、9月29日には、越中の国人の多くが、桃井方に味方し同城に参加しているとの風聞が、京都にまで伝わっている（『花營三代記』）。

これに対し幕府は、それに先立つ8月10日、越中守護の斯波義将を京都から越中に下向させ、直常討伐の出兵をはかるよう、守護代二宮門阿に命じた。10月22日になって、下向した守護の斯波軍に能登の吉見軍が加わり、松倉城攻撃が開始される。しかしその決着をみぬまま厭戦^{※3}状況に陥ったらしく、やがて能登勢は、帰国の途についている。

前述したこれまでの加賀・能登・越中における軍事行動の軌跡は、このとき幕府の命令を受けて、守護吉見軍に加わり桃井氏討伐に参戦した、能登武士の得田章房・同章親や得江季員の軍忠状^{※4}（前田育徳会尊經閣文庫所蔵）が語るところである。

桃井氏は、次いで応安3年/建徳元年(1370年)3月、直和が婦負郡長沢（現富山市婦中町長沢）で、越中守護斯波義将・加賀守護富樫竹童丸の連合軍と戦い、敗北して討死する。このためその与党は、松倉城に遁れて楯籠った。その後応安4年/建徳2年(1371年)7月に至り、桃井直常が砺波郡五位庄（現高岡市福岡町付近）の合戦で、能登勢（能登守護吉見軍）に大敗したのを最後に、南北朝期の北陸における桃井氏の反幕府的行動は、終わりを告げることになる。



桃井軍と吉見・富樫・斯波連合軍の進路

※3 戦いを厭（いと）い、回避しようとする事。

※4 後日の論功行賞のために武士が自分の軍功を書き上げ、大將から承認を得た文書。得田章房の軍忠状（得田文書）には、章房が、金丸城の吉見左馬助とともに、野市（富樫城）、平岡野、一条城、井口城、千代様城、松倉城において、桃井軍と連日合戦を繰り広げたと記されている。